

医療法人 溪仁会

# 手稻溪仁会病院

札幌市手稲区前田1条12丁目1-40 ☎011-681-8111

## 地域医療を支える中核病院として 常に挑み続けることが使命

当院は「患者主体の医療に徹する」という基本理念のもと、1987年に開院いたしました。以来、地域の中核病院として総合的な急性期専門医療に取り組むとともに、救急医療の強化や研修医教育にも力を注いできました。

救命救急については、1997年に救急部門を創設し、365日・24時間体制での受け入れを実現。2005年には救命救急センターの指定を受け、北海道で初となるドクターヘリ事業も開始いたしました。また、小児NIVセンターやがん治療管理センターの開設など、地域に根ざしながらも、常に全国レベルの医療をめざしております。

急性期病院としての機能を持つ当院は、他の医療機関との協力体制を築き、地域医療連携を進めてきました。各医療機関が得意分野を生かし、機能を分担することで、より最適なサービスが提供できると考えています。

本年10月には、待望の手稲家庭医療クリニックが始動いたしました。また将来的には、マンパワーの充実を図り、一般診療365日体制で行う構想もあります。地域住民の皆さまに誇りに感じていただける医療機関をめざし、常に挑戦を続けていきたいと考えています。



手稲溪仁会病院院長  
田中 繁道

## DATA

稼働病床数	547床
内 救命救急センター	19床
ICU	12床
SCU	6床
開放型病床	5床

### 診療科目

内科・呼吸器内科・循環器内科・消化器内科・血液内科・腫瘍内科・腎臓内科・外科・呼吸器外科・消化器外科・心臓血管外科・整形外科・脳神経外科・形成外科・精神保健科・リウマチ科・小児科・皮膚科・泌尿器科・耳鼻咽喉科・頭頸部外科・産科・婦人科・眼科・放射線診断科・放射線治療科・病理診断科・麻酔科・救急科・口腔外科・小児歯科・歯科

### 主な特徴

救命救急センター・厚生労働省救急医療対策事業・ドクターヘリ導入促進事業実施主体(基地病院)・臨床研修指定病院・ISO9001/14001認証(審査登録)・日本医療機能評価機構認定病院(一般病院)・プライバシーマーク認定・DPC対象病院 など

### [沿革]

- 1987年 12月 手稲溪仁会病院開院
- 1988年 7月 救急病院指定
- 1990年 3月 総合病院承認
- 1997年 4月 厚生省臨床研修病院指定
- 1998年 4月 メディカル手稲開設
- 1999年 7月 開放型病床承認
- 2000年 5月 手稲溪仁会クリニック開院
- 2001年 2月 ISO9001審査登録
- 2004年 1月 ISO14001審査登録
- 2005年 3月 救命救急センター指定
- 4月 ドクターヘリ正式運航開始
- 9月 日本医療機能評価機構認定
- 2006年 4月 DPC対象病院指定
- 2007年 5月 救命救急センター開設  
地域連携福祉センター開設
- 2008年 4月 小児NIVセンター開設  
がん治療管理センター開設
- 2009年 4月 地域がん診療連携拠点病院
- 10月 手稲家庭医療クリニック開院



# 手稲溪仁会病院

一人でも多くの生命を救うために……………[ドクターヘリ事業]

目的 地域の救命救急・医療体制の充実 ▶ 結果 迅速な救命救急活動の実現

ドクターヘリとは、救命救急処置を必要とする救急現場へ、速やかに救急専門医師と看護師を派遣し、治療開始時間の短縮を図る救急医療専用のヘリコプターです。また、患者さまの状態に応じ、決定的な治療が可能な医療機関への搬送時間短縮という役割も担っています。

当院では、2005年3月の救命救急センター設置にあわせて、同年4月から道央ドクターヘリの基地病院に指定



され、本格的な運航を開始しました。迅速かつ的確な治療が必要とされる救急医療の現場において、一人でも多くの患者さまを救う取り組み

として、地域からの大きな期待に応えています。

当院はドクターヘリについて、2002年より周辺自治体や医療機関、消防機関と協力し「北海道ドクターヘリ運航調整研究会」を設立。研究運航を重ねたうえで、導入を実現しました。現在、運航圏域は道央圏および、手稲溪仁会病院を中心にして半径100キロメートル圏内となっています。

北海道のような広域なエリアでは、ドクターヘリの機能がより重要となります。当院ではドクターヘリの安全かつスムーズな運航をめざし、地域の消防機関、その他関係機関との連携にも力を注いでいます。

北海道ドクターヘリ運航実績

	総出動要請件数	出動件数	未出動
2005年度	346件	261件	85件
2006年度	496件	389件	107件
2007年度	566件	453件	113件
2008年度	522件	430件	92件

がん治療を受ける患者さまの視点に立つ ……[がん治療管理センターの開設]

目的 治療・看護・ケアを長く継続できる体制づくり ▶ 結果 がん診療連携拠点病院として地域のがん治療をリード



患者さまができるだけ安心して治療を継続できる体制づくりをめざし、2008年4月に「がん治療管理センター」を開設しました。同センターには4つの部署があります。抗がん剤の種類が増え一人ひとりに合わせた投薬が可能になったことから、自宅での生活や仕事を続けながら通院で治療を受けられる「外来化学療法室」。がんそのものや治療の多くに伴う体と心の痛みを和らげる「緩和ケア

室」。患者さまとご家族、地域のの方々への相談業務やセカンドオピニオン外来の受付などを行う「がん相談支援室」。4名のがん登録士を配置し、がん患者の情報の集計と分析を行うことで早期発見や治療効果の向上につなげる「医療情報・がん登録統計室」です。

当院のこうした個々の分野を充実させる取り組みや職員の熱意、これまでの治療実績などが背景となり、2009年4月、厚生労働省により「地域がん診療連携拠点病院」の指定を受けました。地域の拠点となる医療機関として近隣病院とのがん

診療連携を図りながら、がん治療を受ける患者さまの視点に立った、充実したがん治療への取り組みを進めていきます。



30年のあゆみ

組織一覧

この道をひらく

わたしたちのCSR

ステークホルダーとの対話

環境報告

トップメッセージ

地域の皆さまと手を取り合って……………[ 市民公開講座の実施 ]

目的 患者さまとご家族へのサポート

結果 病気や治療に対する不安の解消・予防への啓発

当院では、患者さまやそのご家族を対象にした市民公開講座を開催してきました。近年は、特に関心の高い、「腎臓病教室」と「母親教室」の2教室を実施。入院患者さまやご家族、地域住民の方なども含め、多いときには80名ほどが受講されました。



講義では、医師や看護師、薬剤師、管理栄養士などが診療面や生活面などへのアドバイスをを行い、会場からの質問にも各専門職がわかりやすく回答。「実践しやすい内容で、役に立った」と好評を得ています。

また、当院が2009年4月1日に、厚生労働省より地域がん診療連携拠点病院の指定を受けたことに伴い、がんに関する市民フォーラムの開催も始めました。毎回、具体的な症例などの講演に続き、医師、看護師や医療ソーシャルワーカーらと交流する機会を設けています。この他、悩みや不安を持つがん患者さまが、同じ悩みを持つ方々と医療者と情報交換し、ともに支え合う場となることをめざして月に2回、定期的に、がん患者サロン「さくら会」を開設しています。

こうした取り組みは、地域の皆さまのニーズに応える医療機関としての役割でもあります。これからも皆さまの声を取り入れながら、継続していく考えです。

患者さまの診療計画をスムーズに……………[ 地域連携クリニカルパス ]

目的 急性期から回復期までの診療計画を可視化

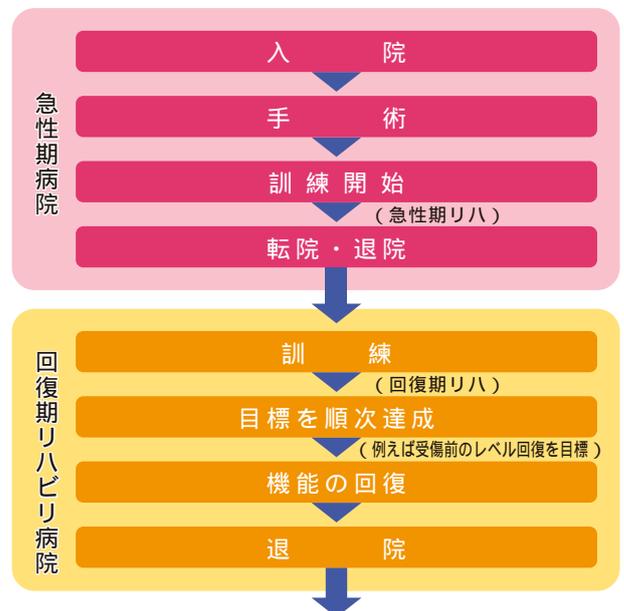
結果 転院後のスムーズな診療・患者さまへの適切な診療情報の提供

当院では地域医療連携を推進してきました。その取り組みの一環として実用化したのが地域連携パスです。地域連携クリニカルパスとは、入院から回復、在宅までのケア全体を示した診療計画のことで、関係する機関同士で患者さまの情報を共有するために用いられます。北海道ではまだ実施地域は少なく、手稲周辺地域では当院が中心となって、「大腿骨近位部骨折地域連携パス」と「脳卒中地域連携パス」が導入されています。

地域連携クリニカルパスによって診療を可視化し、治療が終わるまでの方針をわかりやすく示すことで、転院後や在宅に移ってからも診療がスムーズになり、患者さまは的確な治療を受けることができます。また、治療が現在のどの段階にあるのかといった情報を、患者さまやご家族と共有することで、安心して治療に臨んでいただけます。

これからはさらに地域連携クリニカルパスによる提携医療機関のネットワークを広げ、適切で迅速な医療サービスの実現に向けて努力していきます。

急性期病院と回復期リハビリ病院との地域連携クリニカルパスイメージ



## 「医療機関とのスムーズな連携が、地域医療の質を守る」

- 地域医療連携への取り組みを考える -

手稲溪仁会病院では、かねてから地域での医療連携を推進してきました。地域全体の医療の質を守り、さらにそれぞれの機能強化を図る取り組みについて、地域連携福祉センター長として医療連携をすすめてきた田中繁道院長を中心に、これまでの活動や今後の展開などについて考えていきます。



手稲溪仁会病院  
院長・  
地域連携福祉センター長  
田中 繁道



手稲溪仁会病院  
リハビリテーション部  
部長  
青山 誠



手稲溪仁会病院  
地域連携福祉センター  
課長  
清水 信明

### 医療機関が手を取り合う 連携システムをめざす

**田中** 今年の11月で地域連携福祉センターが開設して2年になります。だいぶ時間がかかりましたが、ようやく地域医療連携のシステムが回り出したと思っています。

**清水** 現在は193の医療機関が当院と提携されています(2009年11月現在)。地域連携福祉センター経由の紹介数も着実に増えています。医療機関にも患者さまにも、地域医療連携が少しずつ理解されてきました。

**田中** 私が当院にきた1997年当時は、すでにベッド数不足が問題となっていました。救急医療を受け持つ当院としては、急性期の機能を強化する必要があると強く感じました。その頃、医療連携という言葉はまだ一般的ではありませんでしたが、近隣の医療機関との協力関係を築き、互いに補い合いながらやることが解決策になると考えたのです。地道に他の医療機関に働きかけを行いました。そこで2004年に「逆紹介をしよう!」という院内宣言を出したのです。当院が積極的に患者さまを紹介すれば、他の病院も信頼してくれるはずだと。院内にはとまどいもありましたが、それをきっかけに、大きく前進しました。

**清水** 私たちも、他院の先生方と直接会って、当院の地域医療連携の仕組みやメリットについてご説明してきました。外部との情報共有もできる限り行うなど、提携医療機関に信頼される運営を心がけています。

**田中** 患者さまにとっても、カゼをひいたときなどは、当院で何時間も待つよりも近くの病院でスピーディな診察を受けた方がいいはず。当初は、逆紹介で他院への転院をすすめると、涙ぐまれる患者さまもいらっしゃいました。しかし、何かあればいつでも引き受けますよ、という姿勢を示すことでとても安心されるようです。

**青山** 転院先から外来通院される方もいます。どのように経過をみていくかは、患者さまに選択してもらうことで、スムーズに移行できているように思います。早いタイミングで転院したことが、すごく良かった、という評価も多々いただいています。

### 地域の患者さまと医療機関に 信頼される中核病院として

**田中** 地域医療連携を推進するなかで、非常に大きな役割を果たしているのが地域連携クリニカルパスです(28ページ参照)。

**青山** 現在、運用されているクリニカルパスは、大腿骨近位部骨折地域連携パスと脳卒中地域連携パスです。リハビリ専門の医療機関に、患者さまの回復期リハビリを担当してもらう上で、必要な情報を急性期病院から回復期病院へ伝える情報伝達ツールとして汎用性の高いパスをつくりました。また、本パスは退院後の患者様情報を回復期から急性期へ伝えるツールとしても使われます。

**田中** このパスはとてもよくできていて、十分な情報が網羅され、どの医療機関でも使いやすくなっています。脳卒中地域連携パスは、すでに全道的に広

がっていますし、大腿骨近位部骨折地域連携パスも今年から運用エリアが広がる予定です。標準的なパスとして全道に根付いてほしいと思っています。

**青山** 患者さまの満足度もかなり高くなっています。実際、リハビリ専門病院で、回復期リハビリを行うことによって、機能レベルが向上し、自宅復帰率が高まるという結果が出ています。リハビリに特化した病院ならではの、きめ細かなケアによるものだと思います。

**田中** 各病院が機能分化することで、その病院が得意とする機能は強化されます。医師や看護師、コメディカルスタッフなどスタッフのレベルも上がります。それによってサービスへの満足度も高くなるのです。

**清水** 現在は、慢性腎臓病と、PSA検査後の地域連携パスについても準備が進んでいます。すでに地域連携パス運用のノウハウがあるので、スムーズに進むと期待しています。

**青山** 病院間の信頼関係がないと、医療連携は成立しません。今後はかかりつけ医やケアマネジャーなどを含めて、信頼関係をつくり上げることが大切です。その後であれば、連携パスも浸透しやすいでしょう。

**田中** 地域医療連携の取り組みは、手稲溪仁会病院にとっての使命です。地域の中核病院として、住民と医療機関から信頼されること。そして互いに手を取り合いながら進んでいくこと。“一緒に医療をやっていく”という姿勢で、地域の医療サービスの質を守っていきたくと考えています。

医療法人 溪仁会

# 札幌西円山病院

札幌市中央区円山西町4丁目7-25 ☎011-642-4121

2009年11月名称変更

## ステークホルダーの皆さまに支持される 高齢者医療の未来に向かって

開院30周年となる当院は、高齢者医療において、常に全国の先駆けとなる事例に取り組んでまいりました。今年の11月には「札幌西円山病院」と改称し、歴史の継承と、新たな時代へ向かう決意を新たにいたしました。

当院では30年間変わらぬ理念として、「親切 丁寧 敬愛」を掲げています。これは、患者さまやご家族、スタッフなどすべての人とのコミュニケーションの基本であり、当院が30年続いてきた根幹であると考えています。

現代の日本は高齢化率が21%を超える、“超”高齢社会となっています。激変する医療制度のなか、質の高い医療を実現するには、治療の「根拠」となるエビデンスの確立が必要と考え、1990年代の後半からは科学的な知見に基づく高齢者医療を実践してまいりました。

神経内科学を中心とした老年医学、リハビリテーション医学、老年看護が当院の柱です。この3点に磨きをかけながら、患者さまの生活の質はもちろん、当院を支えるスタッフの人生の質にも目を向け、これからも一歩一歩誠実な活動を積み重ねていきたいと考えています。



札幌西円山病院院長  
峯廻 攻守

## DATA

稼働病床数……………869床  
内 介護療養型医療施設……………310床  
療養病棟入院基本料……………301床  
障害者施設等13対1入院基本料…169床  
回復期リハビリテーション病棟2…89床

### 診療科目

内科  
神経内科  
リハビリテーション科  
循環器内科  
歯科

### 主な特徴

ISO9001/14001認証(審査登録)  
日本医療機能評価機構認定病院  
プライバシーマーク認定  
通所リハビリテーション/訪問リハビリ  
テーション併設 など

### 〔沿革〕

1979年 6月 西円山病院開院  
1990年 7月 医療福祉サービスセンター  
開設  
12月 患者家族の会設立  
2000年 6月 NSTチーム  
(Nutrition support team)立ち上げ  
2001年 1月 ISO9001 審査登録  
2004年 1月 ISO14001 審査登録  
2007年 3月 日本医療機能評価機構認定  
10月 院内保育所「西円山ピッコロ  
保育園」新築  
2009年 11月 札幌西円山病院に改称



患者さまの喜びのために……………[ リハビリテーションの充実 ]

目的 効果的なりハビリテーションの提供

結果 ADL(日常生活活動)の向上、在院日数の短縮

高齢の患者さまにとって、心身に働きかけ、機能の回復や維持、低下を防ぐためのリハビリテーションは非常に大きな意味を持っています。当院では、患者さまの各ステージに応じたりハビリ体制を充実させています。

入院患者さまのリハを回復期、維持期、緩和期に大別し、それぞれ必要なリハビリを提供。回復期については、専門医を中心に、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士によるチームアプローチを行い、365日体制でリハビリを実施しています。また維持期は個別リハに加えて、レクリ



エーションワーカー、健康運動指導士、音楽療法士といった専門スタッフによるグループリハを実施。患者さまが楽しみながらリハビリに参加できる環境づくりを行っています。

在宅については、通所リハビリと訪問リハビリをそれぞれ充実させています。チームには言語聴覚士も交え、在宅でのリハビリ支援を強化してきました。

適切なりハビリの提供によって、生活機能の向上や早期回復といった効果が出ることも実証されています。今後も、患者さまにとって必要なリハビリを追求し続けていきます。



高齢者医療のモデルとして……………[ 高齢者デイケアの取り組み ]

目的 高齢者のための在宅リハビリの充実

結果 利用者のQOLやADLの向上、在宅での機能低下予防

当院は、1994年に老人デイケア施設基準の認定を受けるなど、介護保険制度の導入以前から、積極的に高齢者のためのデイケアに取り組んできました。利用者さまが本当に必要とされるサービスの実現をめざし、他の病院や施設に先駆けて通所リハビリテーションを実施。退院後の継続的なケアや、在宅で療養される方の機能維持に向けたリハビリ、健康管理など、幅広くサポートしています。

現在、デイケア部に所属するリハビリスタッフは作業療法士3名、理学療法士1名、病棟と兼任の言語聴覚士1名の合計5名。また、専任の看護師が3名、介護スタッフが9名おり、互いに連携しながら、身体リハや趣味的活動、入浴サービス、集団体操などを提供しています。その他、口腔機能向上、栄養マネジメントを歯科衛生士、管理栄養士と協力して行っています。近年の傾向としては、40代・50



代の利用者さまも増えているため、それぞれの方の生活環境を考慮しながら、積極的な回復リハや社会的交流活動なども取り入れています。

これからはデイケアの役割がますます重要になると予想されます。これからも当院のスローガンである「親切 丁寧 敬愛」の心を大切に、地域の皆さまに信頼されるデイケアをめざしていきます。



30年のあゆみ

組織一覧

この道をひらく

わたしたちのCSR

ステークホルダーとの対話

環境報告

トップメッセージ



## 「質の高い高齢者ケアを届けるために」

札幌西円山病院は、開院当時に制定した「親切 丁寧 敬愛」の理念のもと、要介護・介護老年病患者さまへの医療サービスを行ってきました。30年の歴史を重ねた高齢者へのケアについて、櫻谷憲彦副院長を中心に現場を支える若手スタッフが、現状と将来の展望を語り合います。



札幌西円山病院  
副院長  
櫻谷 憲彦



札幌西円山病院  
看護師  
菅野 衣美



札幌西円山病院  
介護福祉士  
前田 正浩



札幌西円山病院  
作業療法士  
窪田 真理

### 疾患と折り合いをつけて 予後を楽しみ過ごしてもらおう。

**櫻谷** 札幌西円山病院では、入院患者の多くを療養の患者さまが占めています。しかも、自分たちの親や祖父母のような高齢の患者さまがほとんどです。

**菅野** 高齢の方は抱える疾患がいくつもありますから、疾患との付き合い方、より良い予後を考えることが大切です。例えば、糖尿病でも厳しいカロリー制限ではなく、悪化しない範囲で食事を楽しんでもらいたいなど。

**櫻谷** 医師や看護師は目の前の病気を治そうと動き出しますが、介護やリハビリなど、他のスタッフが集的に見えてくれて、いかに残された日々を快適に楽しく過ごしていただくかということで力を合わせてくれます。

**窪田** 私たちは、患者さまの生活をより良いものにするため、生活の中で困っている事に着目し、心身機能や環境に対するアプローチを行っています。関われる時間は限られていますが、個々の思いを捉えられるよう寄り添う姿勢を大切にしています。

**菅野** 看護師にも目の行き届かないところはありますので、日常生活の援助を担う介護福祉士は、日常生活援助の専門職として大切な存在ですね。

**前田** 高齢の患者さまは、飲水や食事などの日常動作にとっても時間がかかります。でも、コミュニケーションの機会や、楽しみを持つのが生活の質という点では大事だと思います。だから介護では、個人の趣味・嗜好に当てる時間をなるべく多く作ることをめざしています。

**安田** 高齢者の栄養状態は、疾患や口腔問題など、多くの要素が関わってきますので、栄養士もカンファレンスに参加し、他職種と連携して栄養ケアを考えます。また、毎日病室を訪問して、患者さまや病棟のスタッフから情報を集めています。喫食量の減少がみられる患者さまでは、問題の原因を探ることで低栄養状態になる前に解決していくことが重要になります。

**涌澤** 私も他職種と連携しながら患者さまの生活の質を考えるようにしています。書道や詩吟などのボランティア活動を紹介するなど要望に応えることもあります。

より良い療養生活を送るために患者さま・ご家族の気持ちに寄り添い信頼関係を築いていくことが大切と考えています。

### 介護病棟の厳しい現状。 “安心”を提供し続けるために。

**櫻谷** 2012年に介護療養病棟が廃止になると、行き場のなくなる方が出てくるでしょう。医療との関わりが少ない施設へ移れる人はわずかです。どうなるか想像ができませんが、できるだけ診てあげたいという思いがあります。

**涌澤** 患者さまやご家族と接していて「病院にいたら安心」という思いを感じます。ただ、これから病院にいらなくなるかもしれないという不安を持っているご家族は多くいます。そうした思いを受けとめながら今後のことを一緒に考えていきたいですね。

**菅野** 入院されている患者さまは、高齢や重症者のため、自分の意思を伝えられない方が多いです。そうすると、家族がどう看取りたいかという思いを聞



札幌西円山病院  
管理栄養士  
安田 真紀



札幌西円山病院  
社会福祉士  
涌澤 美佳

くことがより重要になってきます。

**窪田** 患者さまや病棟スタッフが抱えている問題をいち早く解決できるよう、リハビリスタッフも病棟とのコミュニケーションをより強められるよう専従体制がとれればと思います。

**菅野** 看護側としてリハビリについて、いつでも相談できる人がいると心強いですね。また、看護師が生活まで観察できることが一番ですが、全体的に人手が足りないので、介護福祉士と深くコミュニケーションを取るようにして補えればと思っています。

**前田** 療養が長期になると、患者さまはずっと同じような環境にいるので、そのまま単調な生活リズムができてしまいます。もっと私たちが患者さまの生活に介入してリズムを変え、生活の質を高めていきたいですね。

**安田** 生活の質という点では、食事は切って離せません。低栄養状態の改善だけでなく、QOLを改善する栄養ケアをしていきたいです。そのために、いろいろな問題を整理する技術を身につけることが自分の課題だと思っています。

**櫻谷** 当院のスタッフはどうしたら尊厳を持って患者さまが人生を終えられるだろうかということを大切に、頑張っています。今後も気持ちを一つにして高齢者のケアに取り組んでいきたいと思っています。

医療法人 溪仁会

# 定山溪病院

札幌市南区定山溪温泉西3丁目71 ☎011-598-3323

## 良質な慢性期医療がなければ これからの日本の医療は成り立たない

当院は、長期の入院が必要な方を対象とした療養型の病院です。患者さまにとって最良の医療環境を築くため、これまで革新的な取り組みを続けてきました。

1999年には「抑制廃止宣言」を行い、職員一丸となって抑制の廃止に取り組んできました。また、ターミナルケアについても早くから検討を重ね、職員が認識を共有できる体制を確立しました。すべての患者さまへのリハビリテーションの実施やNST委員会の設置など、良質な医療の実現を目標に、さまざまな活動を推進しています。

ケアの質を支えているのは、常に努力する職員の高い意識です。患者さまとのかかわりに喜びを感じ、当院で働くことを誇りに思える環境づくりも重視しています。

近年は、医療の性質を広くとらえる狙いから、慢性期医療という表現が浸透してきています。私たちのミッションは、この慢性期医療において日本で有数の病院をめざすこと。職員が持つ仕事への情熱と確かなチーム力を糧に、病院としての力を高めることで、やがて医療全体の質を上げることに貢献したいと考えています。



定山溪病院院長  
中川 翼

## DATA

稼働病床数…………… 386床  
内 医療療養病床…………… 292床  
特殊疾患病床1(一般病床)…… 94床

診療科目  
内科  
神経内科  
リハビリテーション科  
歯科

主な特徴  
ISO9001/14001認証(審査登録)  
日本医療機能評価機構認定病院  
プライバシーマーク認定  
通所リハビリテーション/  
介護予防センター併設 など

### 〔沿革〕

1981年 5月 定山溪病院開院  
1996年 10月 新棟完成  
1998年 11月 日本医療機能評価機構認定  
1999年 7月 抑制廃止宣言  
2001年 1月 ISO9001 審査登録  
2004年 1月 ISO14001 審査登録  
2006年 10月 新新棟完成



人権を尊重した思いやりのあるケアを……………[ 抑制廃止宣言 ]

目的 院内の身体拘束をゼロに ▶ 結果 18カ月でゼロにすることができ、患者さまの生活の質と医療サービスを向上

長期療養される患者さまのなかには、院内を徘徊されたり、点滴の管や医療チューブを抜いてしまう方もいます。かつての医療現場では、そうした行動を制限するために、患者さまの手をひもでしばったり、柵でベッドを囲うといった行為が行われていました。

当院では、1999年7月にこうした「抑制」と呼ばれる行為を全面的に廃止する「抑制廃止宣言」を行いました。患者さまの人としての誇りを尊重した、思いやりのあるケアの実現をめざし、病院全体で運動に取り組んだ結果、院内の抑制を18カ月でゼロにすることができました。たとえ言葉であっても患者さまの人権をないがしろにする行為はあってはいけない、という理念のもと、抑制を伴わない安全なケアを実現した活動は、先駆的な事例として全国から注目を集めました。

この取り組みを広げるために、「北海道抑制廃止研究会」の事務局として研究会の開催などを行い、抑制に関する相談窓口としての活動を担っています。また院長、看護

部長は、NPO法人「全国抑制廃止研究会」の副理事長・理事として、「北海道身体拘束ゼロ作戦推進会議」では座長・委員として活動に加わっています。

### 抑制廃止宣言

・私たちは、このたび「抑制廃止」を宣言いたします。  
・人としての誇りを尊重し、思いやりのあるケアを行います。

- ①抑制とは何かを考え、行動致します。
- ②抑制をなくすことを決意し、実行致します。
- ③抑制を限りなくゼロに近づけるよう努めます。
- ④継続するため、いつでも院内を公開致します。
- ⑤抑制廃止を地域に広げるよう努力致します。

平成11年7月29日



医療法人 溪仁会  
**定山溪病院**

終末期のあり方を見つめて……………[ 終末期医療の取り組み ]

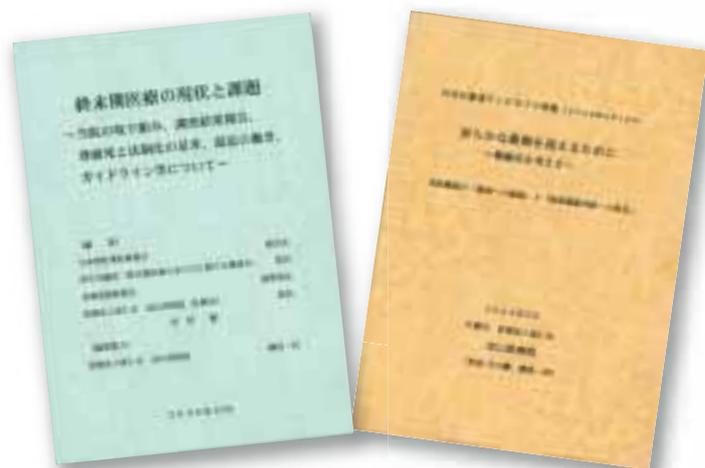
目的 望ましい終末期医療のあり方を検討 ▶ 結果 独自の同意書による定山溪病院方式の取り組み

当院のような療養型の病院で亡くなる方は、2000年の介護保険導入以降も増える傾向にあります。特に70歳以上の高齢者の場合、療養病床で亡くなる方の割合が一般病院での数を大きく超えています。こうした実状から、当院では終末期医療(ターミナルケア)のあり方につ

いて病院全体で検討を重ね、望ましい医療の提供に努めてきました。

1997年4月から1999年3月にかけて、医師と看護師の役職者による「ターミナルケア検討会」を実施。終末期を迎えられた方への対応や、亡くなった方への終末期医療(ケア)に関する事例などを話し合う場を持ち、医師と看護師が情報を共有しながら終末期医療に取り組む体制を築きました。現在は、各病棟で「ターミナルケアカンファレンス」を行い、治療やケアにかかわる全職種が参加して、患者さま本人やご家族が望まれる終末期医療を提供できるようにしています。また、患者さまが亡くなって2週間以内に「死亡後カンファレンス」を実施し、提供された終末期医療について反省や評価を行っています。

患者さまが少しでも安らかな時を過ごし、ご家族にも安心していただけるように、終末期医療への取り組みはこれからも続きます。



30年のあゆみ

組織一覧

この道をはらく

わたしたちのCSR

ステークホルダーとの対話

環境報告

トップメッセージ

## チームによる栄養管理サポート.....[ NST委員会の活動 ]

**目的** チームアプローチによる栄養管理 **結果** 患者さまの栄養状態と身体状況の改善

当院の入院患者さまの多くが長期療養を必要とし、平均年齢も高齢になっています。そうした患者さまの栄養状態や栄養摂取状況を把握し、適切な栄養管理サポートを行うのがNST(Nutrition Support Team)です。専門職種が連携して対策を図ることにより、低栄養の改善といった効果をあげています。

当院では、2004年にNST委員会を立ち上げました。医師、看護師、管理栄養士、言語聴覚士、薬剤師、MSWによって構成され、すべての患者さまの身体状況に合わせた食事形態の検討を行っています。まず患者さまが入院された時点で、その方の栄養ケアに関する方針を検討し、食の提供方法も含めて的確な栄養管理を実施。その後、必ず半年に1回はプランの見直しを行い、栄養状態や体調の変化があれば、栄養管理の方針を再検討します。



NST委員会は毎月1回開催され、職種同士の報告や事例検討が行われるほか、全職員を対象にした勉強会の実施など、院内での啓発活動にも取り組んでいます。2008年には日本静脈経腸栄養学会の「NST稼働施設」として認定されました。NSTの有効性をより高めるために、院内の連携強化をめざしています。

## 地域との温かな交流.....[ 病院体験学習の受け入れ ]

**目的** 医療や福祉についての啓発活動 **結果** 定山溪中学校との継続的な交流、地域の人々との連携推進

当院では長年にわたり、近くにある札幌市立定山溪中学校とのふれあい交流を続けてきました。2000年からは病院関連職業体験の受け入れを始め、毎年、全学年の生徒さんが院内での体験学習に参加しています。

体験学習の前には当院の職員が定山溪中学校を訪問し、病院全体の説明や各職種の業務内容などを紹介。医療や福祉の世界をイメージしてもらった上で、体験学習を実施します。内容は、院内見学やボランティア活動の手伝い、食事介助などの病棟体験、リハビリテーション訓練体



験など。職員が講師となって指導を行い、入院患者さまの協力をいただきながら、医療の現場を実際に体験してもらいます。お孫さんにあたる年代の生徒さんとのふれあいは、患者さまにとって喜びでもあり、大切な交流の場になっています。

地域の人々との温かな交流は、「定山溪病院病院祭」や「盆踊り大会」などでも行われています。さまざまなふれあい体験をとおり、医療や福祉に対して関心を持ってもらうことも、地域に根ざした病院としての役割です。

これからも地域と連携しながら、交流事業を推進していきます。



## 「心通い合うリハビリテーション訓練の提供をめざして」

定山溪病院では患者さまの人権、尊厳、個別性を重んじたケアを心掛けています。特にリハビリテーションについては、1996年頃からはすべての患者さまへの提供をめざし、実現しています。単なる訓練としてのリハビリテーションではなく、リハビリテーションによって患者さまの療養生活をいかに向上させることができるのか、現場で支えるスタッフたちがこれからの課題を探ります。



定山溪病院  
理学療法士  
河野 伸吾



定山溪病院  
作業療法士  
後藤 正寛



定山溪病院  
言語聴覚士  
かねまさ  
印牧 志穂



定山溪病院  
医療ソーシャルワーカー  
金山 晶子

### 患者さまの心を見つめ、 楽しくできるリハビリを。

**河野** 定山溪病院には、高齢の患者さまが多く入院しています。高齢の方にとっては、理学療法で行う基本動作訓練でも負荷量が大いなので、リスクを考えつつ、高い効果が得られるギリギリの所を見極めることが求められます。

**後藤** 日常生活の動作をどのように行っていくのか考えていくことが私たちの作業療法です。どこまでの動作ができるかを患者さまと一緒に探していくというほうが近いかもしれません。病棟や他の職種と協力しながら介助方法などを決めていきます。

**印牧** 言語聴覚療法では、同じくらいの重症度の患者さま5～8名で行う「集団コミュニケーション療法」があります。1対1の訓練だけでは、思ったことをなかなか伝えられずストレスを感じることもあるようですが、他の患者さまと一緒にだと、皆さんの頑張る姿が刺激となり、身振りでも伝えたいという気持ちが芽生えます。また、当院の特徴として、大部屋で訓練することで、担当以外のスタッフや他の患者さま達と、挨拶が活発に交わされて大切な交流の場となっております。

**河野** 当院では、リハビリテーション部を中心に、シーティングクリニックという独自の取り組みをしています。車いすが身体に合わない、起き上がることができず寝たきりになる可能性があります。身体の状態にあった車いすを提供できるかどうか、ベッドから離れられるかどうかの一つのキーポイントになってきます。

**金山** 入院相談時、当院の特徴的な取り組みを含め、リハビリテーションなどについてご家族や患者さまへ説明するのが私の

仕事です。また、入院後も患者さまがどのようなリハビリテーションを行っているか担当のスタッフと情報交換し、ご家族の不安を取り除くことも私たちの重要な役割です。

**後藤** 長期の入院でストレスを抱える患者さまの気分転換を兼ねて、ご家族へプレゼントする作品を作ることもあります。人のために何かすることで、生き生きとした表情が見られるので、積極的にご家族や他の人との関わりを取れるように考えています。

**河野** 理学療法でも、患者さまは運動する楽しみのほかに、訓練室に来て人に会う楽しさを感じているようです。かなり高齢になると機能維持が目的となりがちですが、高齢の方でも能力が伸びる方もいます。患者さまお1人おひとりの可能性を見極め、コミュニケーションを取りながら、ご本人の希望を取り入れ、リハビリテーションを楽しくできることを大事にしています。

**金山** 私たちは患者さまに接する時間が決められていない分、なるべく病棟に上がって患者さまの要望などを確認しています。『リハビリテーションの回数が少ない』と不安を感じている方もあり、言葉にしない部分も感じ取れるように注意しますね。直接リハビリテーションに関わってなくても、スタッフ全員、チームで患者さまを支える体制を作っています。

### よりよいケアを提供するため、 現状のレベルに満足はしない。

**後藤** 今、私が課題だと感じるのは、患者さまに接する時間が限られるので、病棟での生活を十分に見ていないところ。病棟で、生活場面に密着した関わりをできればと思います。

**河野** 私の希望としては、もっと福祉用具

を入院生活に取り入れたいと思っています。例えば車いすの工夫や、リフトなどを使えば、より安全に効率的に介助できるようになると思います。

**印牧** 言語聴覚士は全体的に経験年数が浅く、後輩をどう教育するのが課題です。ただ、当科の今年度の研究から、経験年数に関わらず訓練や関わりについて、同じ様なことで困っていたことがわかりました。もう少しディスカッションをすれば、前例がわかって、その事をスタッフ間で共有できれば今まで以上に前向きに問題に取り組め、質の高いリハビリテーション、患者さまの満足度につながると思います。

**河野** 理学療法科も1・2年目のスタッフが多く、その教育が課題です。それでも新人期間は手厚い教育体制で、その期間中に、自分でやりたい業務を見つけることができる環境を作りたいですね。(他のスタッフ全員での目配りが必要なので大変ではありますが)。また、シーティングクリニックの取り組みは全国でも数少ないので、もっと病院外に広めたいし、逆に他の病院などで研修したことも、臨床の場に取り込んで、貪欲に向上していきたいです。それをみんなが同じレベルでできれば、よりよいリハビリテーションを提供できます。

**金山** 相談業務を通じて、ご家族とリハビリテーションスタッフとの調整役であること、また、シーティングクリニックや終末期におけるリハビリテーションの関わりなど当院のリハビリテーションを中心とした特徴ある取り組みをお伝えできる存在でありたいです。

**後藤** 最近は終末期の方が増えていますが、リハビリテーションの立場でも関わり方の難しさを感じますが、その人らしい生活を大切にして、最後によかったと言ってもらえることをめざしたいですね。

医療法人 溪仁会

# 溪仁会円山クリニック

札幌市中央区大通西26丁目3-16 ☎011-611-7766

## より確実な健診と指導をとおして 北海道の保健に貢献するために

当クリニックは、病気の早期発見と予防を目的とした健診事業、およびその結果に基づく生活習慣改善指導を中心に、地域の健康を守るための活動を展開してきました。各種人間ドックや企業と提携した職場健診、地方自治体の委託による介護予防事業など、札幌市にとどまらず、社会情勢に応じたサービスを提供しています。

2008年4月に特定健診と特定保健指導が義務づけられたことによって、「病気を防ぐ生活」という観点が重視されるようになりました。私どもでは検査・診断の精度向上だけでなく、その後の継続的な指導やアドバイスといったフォローにも力を入れています。また、講演や広報誌の制作など、啓発活動にも力を入れています。

来年度は、ゆとりある環境づくりと検査の効率化を図る予定です。検査システムの見直しなども行い、受診される方とスタッフ双方が満足できる体制をめざしています。他の医療機関や施設とのネットワークづくりなどを含め、多くの皆さまから信頼されるサービスを構築していきたいと思っています。



溪仁会円山クリニック院長  
道家 充

## DATA

健診事業(施設健診・巡回健診)  
健康診断  
人間ドック、生活習慣病健診、特定健診  
オプション検査  
CT、胃内視鏡、頸動脈エコー、内臓脂肪、乳がん、子宮がん、脳ドック、PET検査 など  
健康相談  
保健相談、栄養相談  
保険診療  
生活習慣病外来、再検査  
主な特徴  
ISO9001/14001認証(審査登録)  
プライバシーマーク認定 など

### [沿革]

1990年 1月 溪仁会円山クリニック開設  
2001年 2月 ISO9001審査登録  
2004年 1月 ISO14001審査登録



生活習慣病の予防をサポート……………[ 特定健診・特定保健指導 ]

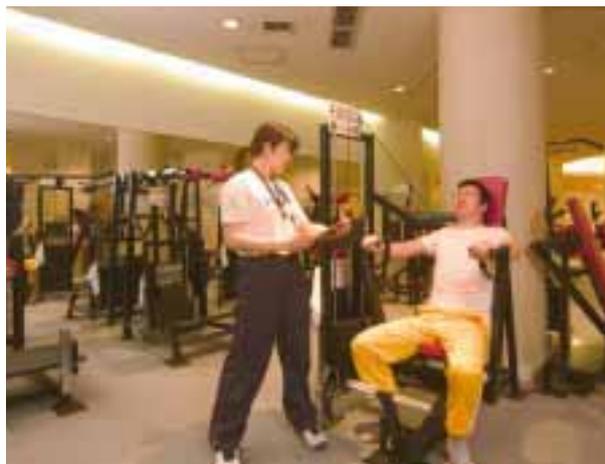
目的 生活習慣病リスクの定期的なチェック → 結果 生活習慣の改善、病気予防

当クリニックは開設時より、病気の早期発見や健康管理に主眼を置いた健診事業や、生活習慣病などの予防に取り組んできました。2008年4月から、特定健診・特定保健指導が始まったことで、当クリニックではこれまで積み重ねてきた検査や指導のノウハウを生かし、さまざまなサポートを行っています。

特定健診は40歳～74歳の方を対象に、糖尿病や高血圧症といった生活習慣病のリスクチェックのために、年に1回実施されます。この健診で生活習慣の改善の必要性があると判断された場合に行われるのが特定保健指導です。病気を引き起こす要因を要注意段階で改善するのが狙いのため、メタボリックシンドロームの予防と具体的な保健指導に重点が置かれています。

当クリニックでは、医師のほかに、保健指導や栄養指導などを担当する専任のスタッフが、一人ひとりに合わせた生活習慣改善のためのプログラムを作成し、継続的に

支援。食習慣や運動習慣改善を中心に、面談やメールでの指導などを行います。また、併設施設での運動プログラムの提供や、手稲溪仁会病院との提携など、病気を未然に防ぐためのサポートシステムが整っています。



皆さまの健康を守るために……………[ 検査体制の充実 ]

目的 より質の高い検査体制の確保 → 結果 受診者の満足度向上



当クリニックは、健診事業に特化した医療機関として、最新の検査体制の整備に努めています。提供している検査としては、人間ドックや企業健診、札幌市民健診のほかに、器官や部位ごとのオプション検査、企業や地域に出向いて健診を行うなど、日常の健康管理から、病気の早期発見まで、受診される方の要望に沿った、幅広い検査項目を用意しています。

また、どの検査においても高い質の確保をめざしています。最新の検査設備の導入だけでなく、常にスタッフの技術や知識のレベルアップを図り、検査精度を向上させています。また、社会的ニーズなどを踏まえ、検査項目の定期的な見直しなどを実施。男女それぞれの必要検査項目に応じた「メンズドック」や「レディースドック」を設けるなど、検査体制を充実させています。

検査時の待ち時間の短縮や迅速な結果報告、過去の検査データに基づく検査内容のアドバイス、受診後のフォローの実施など、受診者に満足していただけるサービス体制にも留意しています。今後は、ハード・ソフト両面をさらに充実させる予定です。



30年のあゆみ

組織一貫

この道をひらく

わたしたちのCSR

ステークホルダーとの対話

環境報告

トップメッセージ

## 健康づくりをより身近なものに ..... [ 各種啓発活動 ]

**目的** 指導や相談による健康意識の増進

**結果** 自発的な健診受診の増加、病気予防に向けた生活改善

近年は、健康づくりへの関心が高まる傾向にあり、食習慣や生活環境を改善しようという人が増えています。当クリニックは早期から、保健師や管理栄養士による保健・栄養相談、地域での保健指導、企業と提携したアドバイス事業など、健康な生活環境づくりに向けた活動にも取り組んできました。

現代の医療では「病気をいかに未然に防ぐか」が一つのテーマになっています。そのためにも、生活習慣の改善や定期的な健診によるチェックが不可欠です。当クリニックは地域での講習会や教室、運動指導などによって、幅広い年代の人たちが日常的に取り組める健康づくりを推進しています。

また、健康に対する意識啓発にも取り組んでいます。外部での各種講習会や指導に加えて、2004年より院内広報誌『えん』を発行し、生活習慣の改善方法や健康づくりの話題などを掲載。さらにポスターやパンフレットなどのツールによって、健診

の必要性や健康づくりの大切さを訴求しています。

より多くの方々に健康な生活への関心を持ってもらえるように、これからも指導や啓発活動を継続していきます。



## エネルギー転換によるエコ効果 ..... [ 環境保全の取り組み ]

**目的** エネルギー資源の転換による環境負荷の低減

**結果** CO<sub>2</sub> 排出量の大幅な削減

2004年に溪仁会グループ全体で環境マネジメントシステムであるISO14001の登録認証を行ったことをうけ、当クリニックでもCO<sub>2</sub>の排出削減や環境への影響を低減する取り組みを行ってきました。なかでも大きな効果があったのが、エネルギー資源の転換でした。

当クリニックでは2006年から、冷暖房設備に使用するエネルギーを重油から天然ガス(都市ガス)へと転換を進め、2007年度に完全転換しました。天然ガスは重油よりも二酸化炭素排出係数が低く、環境にやさしいエネルギーとされています。また、道内のガス田で採掘されるクリーンなエネルギーとしても注目を集めています。この天然ガスへの転換によって、前年対比でグループ全体のCO<sub>2</sub>排出量を大幅に削減することができました。

こうした大型省エネ設備の導入以外にも、水道使用量の削減や環境に配慮した事務用品の購入、車両燃料の使用量削減など、環境保全活動を継続的に行っています。当

クリニックの全職員が環境保全への高い意識を共有し、業務内容の見直しや改善などによって、環境負荷の低減が実現できるように、組織内での啓発活動にも取り組んでいます。



## 「 溪仁会円山クリニックの“これから” 」

病気の早期発見・予防に努める健診施設である溪仁会円山クリニックは、2010年で開設20周年を迎えます。施設改修にあたり、ディズニーランドの精神から学び取ろうと、頭文字を取って名付けたDLプロジェクトを立ち上げました。プロジェクトリーダーとして改革を推進する塙なぎさ副院長を中心に、将来の展望を話し合いました。



溪仁会円山クリニック  
副院長  
塙 なぎさ



溪仁会円山クリニック  
経営管理部 次長  
山谷 明弘



溪仁会円山クリニック  
放射線科 主任  
工藤 憲一



溪仁会円山クリニック  
保健事業部 課長  
木村 礼子

### 「また来たい」と思われる健診を。夢の国に学ぶプロジェクト開始

**塙** DLプロジェクトはお客さま主体で物事を考え、「またここで健診を受けたい」と思ってもらえる健診を行おうという気持ちから始まりました。健診を受けたお客さまが納得できること、気持ちよい時間を過ごせること、それはディズニーランドに学ぶものがあると思い名付けました。具体的には6つの委員会を設け、全職員が関わる形にしています。

**山谷** 今回設置した委員会は、「人材育成」「アメニティ向上」「IT化推進」「広報活動」「外来運営」「施設管理」の6つの委員会です。

**塙** 各委員会は、トップダウンではなく職員全員でアイデアを出して、それを実現していこうというもの。委員会を掛け持ちしている人もいますし、つながりを持った活動ができていますよ。

**工藤** 私は施設管理と外来運営の委員を兼務しています。開設から20年経って、設備は随時変えてきてはいますが、当然お客さまのニーズも変わりますのでそれに応える施設づくりが必要です。例えば検査に時間がかかるのは何よりの負担ですから、お客さまの動線を考えたり、検査室のレイアウトを変えたりすることも必要です。

**塙** 外来については、「生活習慣病外来」を設けて、検査を受けた方が指導にも来るような、“線”としてつなげたいと考えています。

**木村** 健診で正常値から外れた人が、病気にならないようにご自身で生活改

善する、生活を見直す、そのフォローが私たち保健師の仕事です。健康に危機感を感じるタイミングは人それぞれですが、外来で折に触れ言い続けられれば、気付いていただくチャンスを増やすことができます。

**塙** 健診の結果は数値で出ます。でも、プロが見ればその人の生活が見えます。単に紙で数値だけを渡すのか、それとも改善点を指摘するのか。せっかく健診を受けていただくのだから、生活習慣を変えるチャンスですよね。ただし、当クリニックで健診を受ける人は年間30,000人、膨大なデータが蓄積します。的確に指導するには、相当ITの能力がないと外来が機能しません。

**山谷** そうですね。外来がしっかりと機能するためには顧客・患者情報の管理が大切です。健診の情報を連動させることで、治療につないだり、精密検査が必要なときにスムーズに予約できるようにもできます。また、他の医療機関と情報共有することで、次回の健診や指導に活かせるメリットも出てきます。

### 単なる検査に終わらせず、心が通い合うサービスをめざす。

**塙** 私たちの仕事は単純な医療・健診のサービスではなく、お客さまの生活・仕事・家庭を第一にした、生き方を尊重するアドバイスでなければいけません。

**木村** 年1回の健診で、お客さまに「また来たい」と思っていたくには感動していただくことが必要で、その感動は人とのつながりから生まれます。です

から、良いサービスを提供するには職員がきちんと成長していかなければなりません。“人財”、良い人材を育てるためにも、私達自身がここの職員でよかったと思える風土づくりが大事だと思っています。

**山谷** 職員がやりがいを持って働くことが、良い仕事となってお客さまへのサービスの向上につながります。私の部署は経営管理部ですが、すべての職員が働きやすい環境をつくる“環境調整部”だと思っています。

**工藤** 技師にとって、良いサービスとはスキルアップと時間短縮です。しかしそのためにハードを整えても、お客さまは機械の新旧ではなく、検査員の言動や態度を見ています。スキルとは技・知識だけでなく、人格面が大切です。その指導は委員会だけでなく、科の中でも必要だと思っています。

**塙** お客さまのご要望はそれぞれ違うので、相手が何を考え、何を望むか、心を読み取る必要があります。それは人間としての関係を築くということ。そういう“血の通った指導”ができる施設でありたいですね。また、健診に来る方だけでなく、病気になるまで健康へのアドバイスを受ける機会がない人は地域にたくさんいます。皆さんが「自分の健康はどうなのか」ということを知りたがっています。一般的な知識だけでなく、そういうひとりひとりの問いにも答えしていく、地域への啓蒙も私たちの大切な仕事だと思います。まだまだこれからやらなければならないことはいっぱいです。

# 社会福祉法人 溪仁会

2009年4月名称変更

## 高齢者福祉の向上と地域との信頼関係の構築 溪仁会グループとしての社会的責任を担う

当社会福祉法人は、2009年4月1日に法人名を設立時からの「南静会」から「溪仁会」に変更し、新たなスタートを切りました。これは、社会福祉法人も溪仁会グループの一組織であることを社会に対して明確に示すと同時に、職員にも溪仁会グループで働くことの誇りと責任を持ってほしい、という強い思いから実現したものです。

当社会福祉法人では設立以来、同グループである札幌西円山病院などの連携関係を生かし、高齢者福祉に特化した福祉事業を展開してきました。福祉制度の施行や改正に合わせ新しい事業に取り組むなど、北海道における高齢者福祉の牽引役としての役割も果たしています。

2年後、当社会福祉法人は設立30周年を迎えます。その支えとなったのは地域との信頼関係でした。これからも皆さまの期待に応えるため、職員一人ひとりが豊かなキャリア形成を図り、質の高いサービスを創出できる組織風土づくりに取り組んでいく所存です。そして、社会ニーズに添いつつ経営基盤の強化をめざし、福祉に携わるものとしての使命を果たしていきたいと考えています。



社会福祉法人溪仁会理事長  
谷内 好

## DATA

- 主な施設と事業  
介護老人福祉施設(特別養護老人ホーム)  
西円山敬樹園  
札幌市中央区円山西町4丁目3-20  
☎011-631-1021
- 地域密着型介護老人福祉施設  
菊水こまちの郷  
札幌市白石区菊水町4条3丁目94-64  
☎011-811-8110
- 介護老人保健施設  
コミュニティホーム白石  
札幌市白石区本郷通3丁目南1-35  
☎011-864-5321
- コミュニティホーム八雲  
二海郡八雲町栄町13-1  
☎0137-65-2000
- コミュニティホーム美唄  
美唄市東5条南7丁目5-1  
☎0126-66-2001
- コミュニティホーム岩内  
岩内郡岩内町字野東69-26  
☎0135-62-3800
- 軽費老人ホーム(ケアハウス)  
カムヒル西円山  
札幌市中央区円山西町4丁目3-21  
☎011-640-5500
- その他  
認知症対応型共同生活介護(グループホーム)・地域包括支援センター・介護予防センター・通所介護(デイサービス)指定居宅介護支援事業所・訪問看護ステーション・訪問介護(ホームヘルプステーション) など

### [沿革] 主な施設の開設状況と法人の動き

- 1981年 12月 「社会福祉法人南静会」設立
- 1982年 4月 「特別養護老人ホーム「西円山敬樹園」開所
- 1989年 4月 「老人保健施設「コミュニティホーム白石」開所
- 1996年 4月 「ケアハウス「カムヒル西円山」開所
- 1998年 4月 「老人保健施設「コミュニティホーム八雲」開所
- 2000年 4月 「介護老人保健施設「コミュニティホーム美唄」開所
- 2001年 1月 「各施設ISO9001審査登録開始
- 2004年 1月 「ISO14001審査登録(法人全体)
- 2006年 6月 「プライバシーマーク取得
- 2007年 4月 「介護老人保健施設「コミュニティホーム岩内」開所
- 2000年 7月 「地域密着型介護老人福祉施設「菊水こまちの郷」開所
- 2009年 4月 「法人名変更」社会福祉法人「溪仁会」

西円山敬樹園

地域の福祉を支えていくために……………[ 高齢者福祉サービスの拡充 ]

目的 高齢者福祉施設の運営による地域福祉への貢献

結果 高齢者福祉の空洞化防止、地域福祉の充実

社会の高齢化が急速に進むなか、高齢者の福祉の拡充が急務とされています。特に高齢化率の高い北海道では、医療や福祉サービスを必要とする方がいても、施設不足などから十分なケアが受けられない、という地域もあります。社会福祉法人溪仁会では、そうした地方からの要請に応え、地域に密着した福祉施設の運営にも取り組んできました。

地方で最初に運営に取り組んだのが、1998年4月開設



の介護老人保健施設「コミュニティホーム八雲」でした。住み慣れた地域で暮らしながら、家庭生活への復帰をお手伝いす



る施設として、八雲町やその周辺部の皆さまにご利用いただいています。続いて2000年には美唄市に「コミュニティホーム美唄」、2007年には岩内町に「コミュニティホーム岩内」を開設。それぞれ入所機能に加えて、デイケアやショートステイも提供しています。

こうした施設は、地域における高齢者福祉の拠点としての役割も担っています。地方においても質の高い福祉サービスを実現できるように、ご利用者さまやそのご家族、地域の人々と手を取り合いながら、地域特性も考慮したケアの実現をめざしています。

ご利用者さまの笑顔とともに……………[ 先進的な福祉サービスへの取り組み ]

目的 充実した福祉サービスの提供

結果 ご利用者さまやご家族の満足度向上、生活状況の改善



社会福祉法人溪仁会では、ご利用者さまに喜ばれ、満足していただける福祉サービスのあり方を追求してきました。新しい施設の開設や設備の導入、工夫をこらしたイベントやリハビリ活動など、常にご利用者さまにとってプラスになるサービスを考え、提供しています。そうした取り組み例の一つが、2007年7月に開設した「菊水こまちの郷」です。

「菊水こまちの郷」は、2006年の介護保険制度の改正に

より始まった地域密着型サービスに基づく施設として、札幌市で初めて開設されました。入居定員29名の地域密着型介護老人福祉施設と、「通い」を中心に「宿泊」や「訪問」などのサービスを必要に応じて提供する小規模多機能型居宅介護の機能を併せ持つ、新しい施設として注目を集めました。

介護予防のための「パワーリハビリ」の導入や、懐かしい生活用品を使った「回想法的リハビリ」の実施など、ご利用者さまのニーズや効果を見据えながら、新しいサービスの提供も行っています。人間性あふれる温かな福祉サービスを目標に、組織全体でこうした活動に取り組んでいます。



30年のあゆみ

組織一覧

この道をひらく

わたしたちのCSR

ステークホルダーとの対話

環境報告

トップメッセージ

自然エネルギーの有効活用……[コミュニティホーム美唄の雪冷房システム]

目的	貯蔵した雪を夏期の施設内冷房に利用	結果	CO <sub>2</sub> 排出量、電気消費量などの削減
----	-------------------	----	--------------------------------

美唄市で初めての介護老人保健施設として2000年4月からサービスを開始した「コミュニティホーム美唄」では、雪氷冷熱エネルギーを活用した「雪冷房システム」を導入しています。美唄市は積雪が多く、街づくり事業の一環として冬期間に降り積もった雪を貯蔵して活用する「利雪」事業に取り組んでいました。「コミュニティホーム美唄」でも、開設時からこのシステムを取り入れ、環境に配慮した施設運営を行っています。



「コミュニティホーム美唄」は、約300トンの雪を冬期間に建物内の貯雪庫に貯蔵し、暑さが厳しくなる7月中旬から8月中旬にかけて、雪の冷熱エネルギーを雪冷房として利用。通所者ダイルム、機能訓練室、事務室などに冷風を送り、快適な環境づくりを図っています。このシステムによって、CO<sub>2</sub>の排出量を大幅に低減できるほか、電気代や冬期の排雪費用の

削減にも役立っています。

この取り組みは、「平成14年度第7回新エネ大賞」新エネルギー財団会長賞を受賞するなど、高い評価を受けました。クリーンエネルギーである雪を活用した、人と環境にやさしい施設として高い関心が寄せられています。

皆さまの声に耳を傾けて……[アンケートの実施]

目的	ご利用者さまご家族からのご意見の把握	結果	福祉サービスの改善
----	--------------------	----	-----------

各施設・事業所では、ご利用者さまご家族からのご意見を把握するために、定期的にアンケートによる満足度調査を行っています。内容は、施設でのサービスや職員の対応についての評価、苦情や相談に関する質問、総合的な評価など。自由回答のご意見欄も設け、率直なご意見やご感想、ご要望などをお寄せいただけるようにしています。



調査の結果は、提供するサービスや環境の見直し、職員の意識改善などに役立っています。また、結果を皆さまに

をお寄せいただくための投書箱を設置しています。いただいたご意見は定期的に協議・検討を行い、具体的な対策を講じるなど、業務改善につなげています。



公表し、課題や今後の取り組みを明らかにすることで、信頼される組織づくりに努めています。

アンケート調査以外にも、随時皆さまからのご意見やご質問

皆さまからのご意見は、たいへん貴重なものとして、全職員が真摯に受けとめています。溪仁会グループが掲げる「安心と満足の提供」という事業理念を実現するために、これからも多くの方々のご意見に耳を傾け、喜ばれるサービスの提供に努めていきます。

30年のあゆみ

組織一覧

この道をひらく

わたしたちのCSR

ステークホルダーとの対話

環境報告

トップメッセージ

## 「未来へと続く、高齢者福祉をめざして」

- 地域社会に貢献する福祉法人として -

超高齢社会の日本において、高齢者福祉は重要課題の一つとされています。社会福祉法人溪仁会は、1982年の西円山敬樹園開所以来、特に高齢者福祉において幅広いサービス展開を行ってきました。機能の異なる4つの施設の職員が、それぞれの取り組みについて、課題や展望を交えて話し合います。



介護老人福祉施設  
西円山敬樹園  
施設ケア部生活支援課  
統括主任  
田村 みか



介護老人保健施設  
コミュニティホーム白石  
副主任  
佐々木 貴紀



あおばデイサービス  
センター  
主任  
佐藤 貴久



小規模多機能型居宅介護  
菊水こまちの郷  
主任  
池端 宏介

### 時代とニーズに添った 高齢者福祉のあり方。

**田村** 西円山敬樹園は、日常生活に介助が必要な方がご利用される、いわゆる特別養護老人ホームです。隣接する札幌西円山病院との連携ができていたため、安心されるご家族が多いようです。また、私たち職員にとっても、医療との連携は心強く、安心してケアを提供できます。

**佐々木** コミュニティホーム白石は、介護老人保健施設の先駆けとして、1989年に開所しました。特徴は、白石区の中心部にある都市型であることと、医療機関などの併設がない単独型という点です。

**佐藤** 1999年開設のあおばデイサービスセンターは、厚別区全域にお住まいの方を対象に、通所でのサービスを提供しています。午前中は主に入浴を、午後は体操やゲームなどを実施して、一日楽しく過ごしていただけるように工夫しています。

**池端** 2年前に開所した菊水こまちの郷は、新しい制度の枠組みから生まれた施設です(43ページ参照)。小規模多機能型施設の方では、イベントや趣味活動などの通所サービスを中心に、必要に応じて「訪問」や「宿泊」を行っています。

**田村** 最近の傾向は、入所されてから、病状の悪化などで病院に入院される方が増えていることです。以前より入所期間は短くなってきています。また、必死の思いで介護されてきたご家族が、私どもの施設をご利用されることで「救われた」「安心した」と言われることも多くなっています。

**佐々木** ほっとされるご家族は多いですね。介護老人保健施設では、なるべく早く在宅ケアに移っていただくのが理想です。

でも、ご家族が面倒を見られず、切羽詰まるケースも増えています。現在は所定の入所期間に細かい取り決めはなく、必要な限りケアをしていく体制になっています。

**池端** ご家族がお仕事の都合などで、施設の送迎時間に合わないこともあります。そのため当施設では、家族送迎の場合は、受け入れ時間を制限せず、朝から夜までご利用いただけるようにしています。

**佐藤** 暮らし方や家族のあり方も変化しています。ご家族に負担がかからないようにショートステイを紹介したり、送迎の際の様子などで気になることがあれば、何らかの対応をするように心がけています。

### 地域の福祉のために わたしがめざすこと。

**池端** 入所を希望される方はたくさんいるのに、施設数が足りていないという問題があります。当施設だけでも、入所待機者が150名を超えています。ショートステイも一時しのぎであって、ご家族の悩みの根本的な解決になっていないのが実状です。

**田村** 高齢者福祉は、多くの問題を抱えています。介護職員の不足もその一つです。当施設では、3年前から介護職の養成にプリセプター制度を取り入れ、技術面と精神面をフォローする体制にしたところ、職員の定着率が高まりました。

**佐藤** スタッフの定着率やスキルのレベルは、ケアの質に直結します。最近、別の業界から転職してくる人も増えています。そうしたスタッフをどう教育し、やる気を引き出すかというのは共通の課題ですね。

**佐々木** 最近では個室型の施設も増え、ユニットケアへと移行してきています。そ

うした施設をうらやましい、と思うこともあります。従来型施設の良さもあります。いろいろな職種が連携しあう大規模多機能型のメリットを生かしたいですね。

**田村** 同様に、従来型の施設では集団行動が多く、なかなか個別ケアに応えられないというジレンマがあります。

**佐藤** デイサービスは、ご利用者さまに笑顔で帰っていただくことが目標です。日中はあわただしくなりがちですが、職員みんなで力を合わせ、サービスの質を高めていきたいと考えています。

**池端** 満足いただくケアには、信頼関係が大切ですが、親しみとなれ合いは違います。当施設ではKS Y(こまちのサービスを良くしよう)委員会をつくり、電話対応などを含め、接遇面の改善を図っています。

**田村** 西円山敬樹園ではこれまで、ご家族と懇談する機会をあまり持てませんでした。これを見直し、3年前からは年に1度、ご家族との懇親会を開催しています。直接、ご家族の本音をうかがい、施設とご家族が協力しあえる環境をめざしています。

**佐々木** ここ数年、ご利用者さまの傾向もだいぶ変わりました。携帯電話やインターネットの使用など、通常の生活の感覚を施設にも求められるケースが増えています。制限はありますが、柔軟に対応できることはないか、考えていこうと思っています。

プリセプター制度  
看護師の養成において採用されてきたシステムで、新人の担当指導者として先輩職員が付き、一定の期間、教育を行うこと。

# 溪仁会グループを取り巻く方々との対話 より良い関係をつくる 情報コミュニケーションを考える

溪仁会グループでは、地域の皆さまからのご意見、ご提案をいただく場として「ステークホルダー・ダイアログ」を定期的に行っています。今回はコミュニケーションをより深化させることをめざし、地域の中核的な医療を担う手稲溪仁会病院の施設見学と合わせて開催いたしました。今後も引き続き、皆さまとの対話の場を設け、当グループの事業運営に反映していきたいと考えております。

30年のあゆみ

組織一覧

この道をひらく

わたしたちのCSR

ステークホルダーとの対話

環境報告

トップメッセージ

## 【出席者プロフィール】



**樋口 哲雄さん**  
手稲溪仁会医療センター  
地域協議会会長  
地域住民10名、手稲溪仁会病院の職員10名で構成される地域協議会会長として精力的な活動を行っている。地域住民、患者さま、利用者さまからのさまざまな要望を受け入れ、病院側に提言・改善を図る。



**明田川 知美さん**  
北海道大学大学院教育学院  
博士課程  
夫と3人の子どもの5人家族。子育てをしながら大学院で勉強中。専攻は教育行政学、乳幼児施設のリスクマネジメント。三女がNICUに入院したことをきっかけに札幌市の小児医療のあり方に関心をもつ。



**宮岸 和子さん**  
NPO法人シーズネット会員  
高齢者のさまざまなサポート事業を行うシーズネット会員。現在は同会の「安心ネット」（孤独死予防の電話による安否確認）の活動、シニア対応賃貸マンション（北区）で週1回のサロン運営などに関わっている。



**下村 笑子さん**  
札幌認知症の人と家族の会  
副会長  
中立な立場で、評議員として社会福祉法人溪仁会に関わる。また、「札幌認知症の人と家族の会」の副会長として、研修会などを通して認知症への理解促進に取り組む。



**司会 伊藤 一さん**  
小樽商科大学商学部教授  
マーケティング論、流通システム論が専門。医療トップマネジメントにも造詣が深く、溪仁会グループCSRレポートでは「第三者意見」を2年間にわたり担当。

## 手稲溪仁会病院における施設見学概要

初めに、ヘリポートで待機していた救急医療専用ヘリコプター（ドクターヘリ）を見学しました。要請からわずか数分で離陸するという機体を目の前に、参加者からは機内の装備や出動までの体制、出動実績などについて質問が出されました。

その後、手稲溪仁会クリニックおよび救命救急センターを見学し、それぞれの施設が担っている役割、診療システムの基本的な方針等について理解を深めました。



※インフルエンザ対策のため、ご参加いただいた皆さんにはマスクをつけていただき施設見学を行いました。

※施設見学および座談会は、2009年10月10日に開催いたしました。

## その病院・施設の“役割”について 理解している人はまだ少ない

**伊藤** 医療や保健、福祉の分野におけるコミュニケーション向上の必要性はますます高まっています。それぞれのお立場から、溪仁会グループの医療への取り組み内容や活動について、患者・利用者、あるいは地域社会に対して「もっとこんなふうにアピールしたらいいのに、こんなことを伝えたらいいのに」と思う点について自由にご意見をいただきたいと思います。

**下村** 私は、今日見学させていただいた手稲溪仁会病院と同じ町内会に住んでいる者で、この病院が建つ前からの住民です。手稲溪仁会病院は、今は急性期の総合病院、救急救命の病院として地域住民に浸透してきましたが、開設したばかりのころはまだ患者さんも少なかったので地域の住民も利用しやすく、誰でも受け入れてもらえた時期がありました。当時のことを覚えている高齢者にとっては、なかなかその切り替えが難しく、期待と違ったという意見も時々聞きます。

**伊藤** 地域の方々にとっては、日常的な病気の診察をしてもらえる病院としての役割を期待していたということですね。

**下村** 良い病院ができたから、みんなの「かかりつけ医」になってほしいという願いがあったと思います。いつでも歩いて行ける、顔を合わせて診療していただいて、またいつでもいっしょという信頼関係のある町医者を目指した人も多いです。そういう人にとっては、病院が急性期や高度救急という使命を担ってくるようになると、敷居が高い、期待と違ったということになると思います。なぜ大きな病院との使い分けが必要なのか、町医者との連携、つなぎをもっとうまく利用者に伝えてくださったらいいいのかなと思っています。

**樋口** 私は手稲溪仁会医療センター地域協議会を立ち上げて14年になります。地域住民の協力を得なければならないことがいろいろありますので、住民の声を聞いたならそれを即座に溪仁会にお伝えして、改善してもらおう。こういう形でともに歩んできました。ですからよくわかるのですが、医療連携やかかりつけ医について理解していない人もたくさんいます。これが、誤解を生む最大の悩みです。「この病院に来たのに、なぜ途中で投げ出されるんだ」とか「ここでは診てくれない」。そういう誤解が生まれています。「なんだ、俺はここを選んで来たのに」という感情が先にあるものだから、先生や看護

師さんがいくら説明してもなかなか理解できない。苦勞しているのはそこだと思います。病院にしても、福祉施設にしても、それぞれの機能なりがもっと理解されるといいんですが。

**宮岸** 自分の住んでいるところに病院があるというのはとても安心なことですね。手稲溪仁会病院には何度か外来でお世話になっていますが、これだけいろいろ役割を持った施設があることを知りませんでした。インターネットで検索してみたら、健診施設ですとか長期療養の病院、生活支援の施設など、ほんとうにたくさんの病院や施設があって驚きました。地元にある病院のことを私はもう少しよく知るべきだったと思っています。

**明田川** 私は札幌に32年間住んでいますが、私自身は溪仁会にかかったことはなくて、母が腰痛で診療してもらったとか、それぐらいの関わりです。ただ、医療に関しては一市民として関心があります。先ほど病院内を見学させていただいたことはすごく良い機会になりました。もっと私たち自身が地域の中で情報を得ていこうとすることが、医療機関や福祉施設との信頼をつくることにつながるのかなと思います。

**樋口** 私たち協議会でも利用者によく話しているんですが、患者としての賢いかかり方は必要です。私は、知っておかなければならない重点的なことを1冊にまとめて持って歩いて、患者さんや利用者さんに誤解や問題が起きた時に説明しています。そうすると皆さん、「あっ、そうなんだ」ということで理解してくださいます。提供する側も、利用する側も、お互いに理解しあって納得してかかることが大事です。

## 相互理解を深めるためには、 もう一歩すすんだアプローチが必要

**伊藤** 溪仁会グループでは、「CSRレポート」や「サラネット」（広報誌）など、さまざまな形式で情報を提供しています。現状としてはそれらの方法で伝えきれていないことが課題でしょうか。

**宮岸** 私は、1、2度広報誌を手にしませんが、溪仁会グループを利用したことがない方はなかなか入手できないですよ。もう少し広く、地域全体で周知できる方法があればいいかなと思います。

**明田川** 私は子どもが3人おりますので、小児3次救急をこちらでされているということで親としてはとても心強く思っています。

溪仁会グループを取り巻く方々との対話

## より良い関係をつくる 情報コミュニケーションを考える

治療方針にしても子どもの体に負担をかけない治療などを工夫されていますよね。溪仁会グループでどんな取り組みをされているのかを、子育てをしているお母さんたちにもっと知ってもらえる機会があればいいですね。

**樋口** 一番いいのは、住民組織を活用することだと思います。いろいろな住民組織の人たちに実際に見てもらおう。知ってもらおう。そこから始めていかないと、いくら立派なものがあったとしても留まってしまうことがあります。住民であれば、「あそこにあるのはどんどころだ？」から会話が始まって、地域全体に広まっていく、そういう効果があります。

**伊藤** コミュニケーションする際の情報収集に住民組織の力を活用する、情報を提供する場合も同じように地域の人に見てもらって、「こういう病院・施設ができていぞ」という話をしてもらえば住民が納得しやすいということですね。広報誌などでピーアールするのも一つですが、地域のボランティアの方々を中に入れて、患者さんや利用者さんと同じような目線でピーアールするのも一つの方法ですね。

**下村** 人は必要に迫られると興味を持ちます。ですから、例えばお薬の袋の中に予防に関するアドバイスを入れてあげたり、領収証と一緒に「自分たちの病院は特にこういう方のための施設です」というピーアールを入れたり、直接患者さんや利用者さんに手渡すものと一緒に配る方法もありますね。そういうことで啓発していくのがいいのかなと思います。パンフレットを持ち帰ってもらっただけではなくて、その次のステップとして、良いアドバイスがあったらいいなと思います。

**樋口** 溪仁会グループは一つだけの病院ではないですし、法人本部もあります。民間の会社であれば本社、支社という考え方がすぐわかりますが、溪仁会の場合は、法人があって、病院・施設があって、さらにそれぞれに独自の機能や考え方を持った施設があります。それぞれが連携するシステムがあるから安心だということを伝えていけばいいと思います。各病院の現場でそれを伝えるには限界がありますから、グループ全体としてバックアップした方がいいと思います。

それから、溪仁会には、地域の医療機関の先生がたとの連携をすすめていく地域連携福祉センターがあります。私はそれをもっとピーアールすべきだと思っています。連携している病院がたくさんありますから、それを広めることができれば「あっ、この病院うちの近くだ」と思ってもらえます。大きな病院との使い分けを知ることに繋がると思います。



### 安心や信頼を生むコミュニケーション のために期待すること

**伊藤** 医療や福祉のサービス、施設や設備などの面で、患者や利用者が求めることには一人ひとりの異なったニーズがあると思います。皆さんが願う医療や福祉のサービスについてご意見をお聞かせください。

**宮岸** 溪仁会さんでは若い先生がたの研修に力を入れていらっしゃるということで、それは大事なことと思いますが、若い方は実際に高齢になった時のことが体験できていないわけですから、少々ご年配の先生がいらして老人の医療に携わっていただけたらいいなという思いがあります。

**下村** 医療費についてですが、実は後期高齢の患者の中には、医療費のことがわからなくて不安だという声があります。こういう検査には後期高齢者の場合はこれだけの費用がかかりますという説明が欲しいなと思います。医療費は払った後はわかりますが、払うまでわかりません。

**樋口** 不要な検査などはないと思いますが、支払いの後であれば領収書を必ず見る習慣をつけることも患者として必要



です。自分が思っていた金額より高額だったら、その場で聞くというのもいいと思います。検査の仕方、内容によって違ってきますから、私は聞くようにしています。

**下村** 事前に知ることができればいいと思うんですね。例えば歯科であれば、「今度、こういう菌を入れますからいくらぐらいかかりますよ」と、あらかじめ言ってくださる先生がいます。そのようなことが他の医療にもあれば、予算を知ることができます。商品を買うこととは違うとは思いますが、医療の分野でもあらかじめ胃カメラはこれくらいとか、入院費はいくらくらいとか、そういった目安になる一覧表があれば良いと思うことがあります。

**明田川** 私は、溪仁会グループがISO9001を取得されていることにすごく興味を感じています。画一化ではなくて、高い品質を維持したり向上させることを目指した標準化や規格化という意味で、すべてのスタッフが専門性を発揮できる可能性があると思っています。

**樋口** 医師や看護師さんもそうですが、忘れてならないのは裏方さんです。お掃除をする人、給食の人、病院全体が一体となった接遇をやらないとダメですね。チームとして対応できるかどうかです。どこが欠けても、サービスというのはマイナスになります。どんな立派な先生がいても、看護師さんがいても、設備があっても。その点、溪仁会はものすごく親切で、患者さん

の立場に立って、話をよく聞いてくれます。職員みんなの連携がすごいなと思っています。これは「よいしょ」ではありませんよ。

**明田川** ここで皆さんのお話を聞いて溪仁会グループへの信頼度がすごく強くなったと感じます。病院側から提供されるたくさんの資料を熟読するよりも、関心を持っている地域の方、住民の立場として発信される声を聞くことの方が、自分のなかでの納得度が高まるのだとすごく思います。

私も家に帰ったら、夫に伝えようと思うことがたくさんあったのですが、きっと人伝えというか、直接見てきた人、聞いてきた人からここが良かったとか、感銘を受けたということを知るのが一番心に入りやすいのかなと、しみじみ思いました。やっぱり、もっと私たち自身が地域の中で語り合っていくこと、そういった医療や福祉機関と地域ぐるみで関係を持つていくことがコミュニケーションを深めていくことにつながるのかなと感じています。

**伊藤** 今回のステークホルダー・ダイアログでは、情報発信というコミュニケーションのあり方についてのご意見が多かったように思います。情報の受発信の困難さはコミュニケーションの障害に直結します。より良いコミュニケーションのために今後どのように情報を受発信していくのか、改善を加える意味で貴重なご意見をいただいたのではないかと思います。みなさんありがとうございました。



# 人に、環境に、やさしい経営をめざして

溪仁会グループは、2004年にISO14001（環境マネジメントシステム）への登録申請を行い、環境問題への取り組みを強化してきました。各施設においても、職員および地域社会の環境意識向上をめざし、独自の環境保全活動を展開しています。ここでは、この1年間の特徴的な活動内容について報告します。

## 広がる環境保全への取り組み「おたるドリームビーチ清掃活動」

溪仁会グループでは、職員による地域貢献の一環として、「溪仁会グループ環境活動」を実施しています。2008・2009年度で計4回にわたって、グループ職員と家族の参加による「おたるドリームビーチ清掃活動」を実施しました。清掃エリアは、小樽市銭函3丁目のおたるドリームビーチ東側の約1.2キロメートル。回収したごみは、一般ごみ、木枝等の漂流物のほか、家電やタイヤといった不法投棄物もみられました。溪仁会グループは、『環境保全は、継続して取り組むことが大切である』と考え、清掃活動の定期的な実施や他のエコ活動など、より多くの皆さまに参加していただける環境活動を行っていきます。



## リングプル収集活動で車いすを寄贈

溪仁会グループの各病院・施設では、缶ジュースの飲み口についているリングプルの収集活動を2008年3月から行っています。「リングプル再生ネットワーク(プルネット)」に登録し、リングプルを一定量収集してプルネット事務局へ送り、車いすと交換し、車いすを必要としている地域の公共施設へ寄贈し地域貢献することを目的としています。

各施設の患者さま、ご利用者さま、そのご家族、地域住民の方などによる多くの協力をいただき、2009年8月までに車いす1台分にあたる660キログラムを収集することができました（収集期間 1年6カ月）。リングプルと交換した車いすは、公共施設に寄贈される予定です。



## 溪仁会エコの日プロジェクトをすすめています

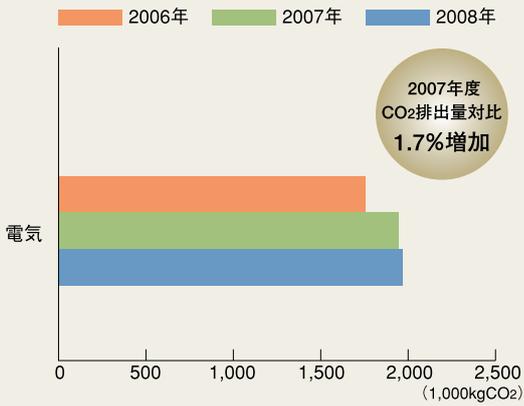
環境活動の効果としてCO<sub>2</sub>排出量の削減が挙げられますが、職員自身の日常活動の成果としては、なかなか成果が見えにくいことも事実です。これまでの活動からそう感じてきた私たちは、今年度から「エコの日プロジェクト」と題し、日常の努力の「見える化」を目指しました。この活動は「同じ日にグループ全施設で同じ環境活動」を行うというもので、内容も日常業務の中でできることを選定します。第1弾は「Noコピーデー」として、1日できる限りコピー機を使用しない活動を行いました。今後も「日常の中でできることを、みんなで継続する」というスタイルで盛り上げていきたいと考えます。

# 溪仁会グループの環境パフォーマンス

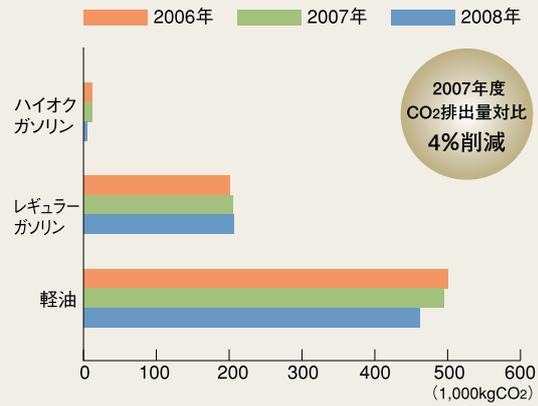
溪仁会グループが取り組むさまざまな環境活動において、その成果の指針となっているのが資源の利用に対してどれくらい環境負荷があるのかを集積し、CO<sub>2</sub>換算によって数値で示した環境パフォーマンスです。2008年度は、前年度対比-7.4%となり、各施設の省エネ活動の定着がみられました。

## 年度別環境管理データ比較

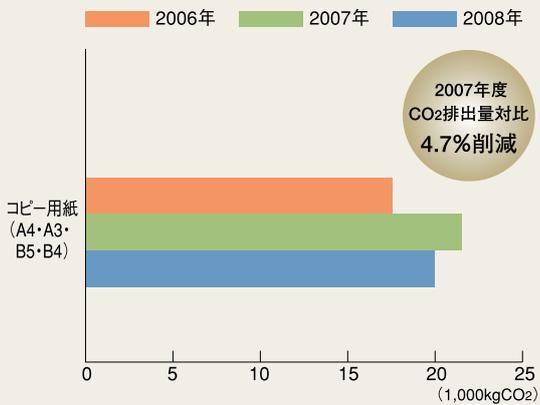
■ 電気 (CO<sub>2</sub>換算)



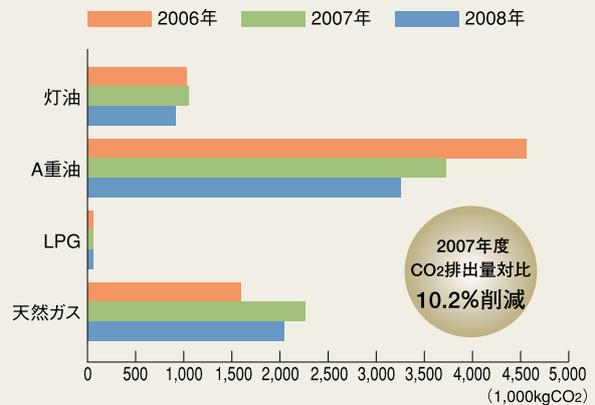
■ 車両燃料 (CO<sub>2</sub>換算)



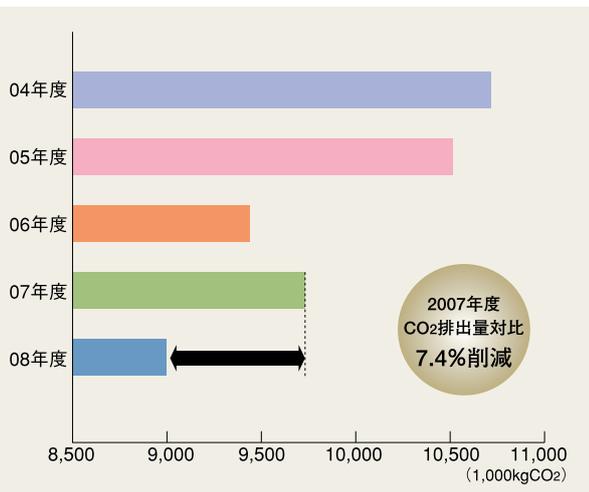
■ コピー用紙 (CO<sub>2</sub>換算)



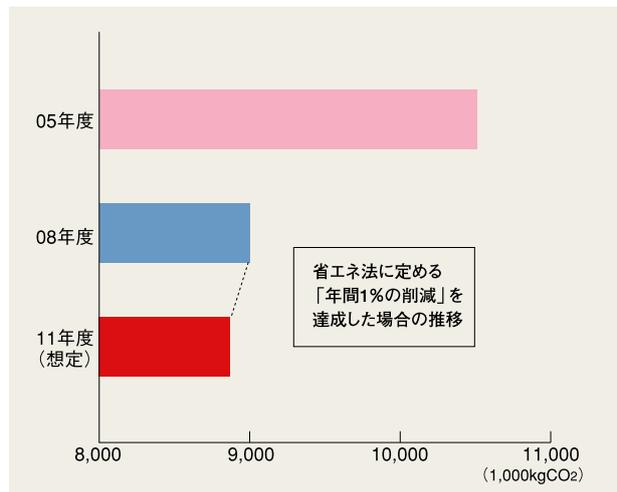
■ 建物設備維持燃料 (CO<sub>2</sub>換算)



## 二酸化炭素排出量の推移 (過去5年間)



## 3年ごとの二酸化炭素排出量の推移



# Top Message

ト ッ プ メ ッ セ ー ジ

30年のあゆみ

組織一覧

この道をひらく

わたしたちのCSR

ステークホルダーとの対話

環境報告

トップメッセージ



## 溪仁会グループの 明日へ向けて。

溪仁会グループ最高責任者  
医療法人溪仁会 理事長

**秋野 豊明**

### 30周年を迎えての感謝

溪仁会グループは1979年の発足以来、確実に成長発展を遂げてきました。一般に、一つの組織・企業が社会に認知される年数が30年といわれますので、重みのある年月と思います。この歴史は職員の努力の成果です。そしてもちろん、今の発展には地域の皆さまの支えが欠かせませんでした。まずは職員と地域の皆さまに感謝を申し上げます。

30周年を迎えるにあたり、溪仁会グループは職員の結束を図ることをめざした事業を主に行いました。一つは、溪仁会健保組合の設立です。職員とその家族の健康を管理・増進することに対し、独自の活動ができるようになりました。次に、「社会福祉法人南静会」を「社会福祉法人溪仁会」へと名称変更いたしました。溪仁会ブランドに統一することで、医療と福祉の連携をご利用者さまにご理解いただき、安心を深くしていただきたいと願っています。

三つめに、ローカルな施設だった西円山病院に全国的なご理解が得られるよう、「札幌西円山病院」に名称変更しました。そして四つめが、手稲家庭医療クリニックの設立です。これからの日本は在宅の医療・福祉が重要になり、地域に密着して在宅の医療を推進する家庭医が必要となります。しかしながら医師育成を担っている大学の医学教育では家庭医の専門医育成は難しいため、第一線の私たちがその役割を担おうと決意いたしました。今までも、これからも、質の高い安全な医療・介護を地域に提供し、私たちの社会的責任を果たしていくことを、新たに30周年の決意として掲げたいと思います。

### 「多数精鋭」の人材育成

医療の質の向上に一番欠かせないのが「人材育成」です。人材の“ザイ”を財産の“財”で表し、人は財産であるというのが私たちの基本姿勢です。

今の医療や福祉はきめ細かいサービスが必要とされます。一般企業は少数精鋭で業績を上げますが、医療や介護福祉では「多数精鋭」、人手はたくさん必要で、かつその一人一人が精鋭にならなければいけません。



精鋭をつくるために大事なものは研修です。溪仁会には業務研修、職種別研修のほか、法人本部主催の研修があります。グループ全体に共通する課題について、階層別や年代別に分けて1回50人程度の単位でさまざまな研修を行います。職員は業務を離れて1日費やして研修し、自分の生き方を見つめ直す貴重な機会になります。毎年参加者が増え、今では3,600人の職員のうち、1年間で延べ1,000人が参加します。私も毎回出席して、皆さんを激励することになっています。

職員が力を発揮するために、やりがいを持って働ける職場環境をどうつくるかという難しい問題があります。働きやすい環境をつくるため、札幌西円山病院にピッコロ保育園をつくりました。また、有給休暇の取得、残業を減らすこと、ワークライフバランス(仕事と生活の調和)を職員にお願いしています。

## 地域医療の中核をめざして

医療は今、病院に収容する医療から在宅の医療へ、患者さまを「待つ医療」から「出かける医療」へと大きく変化しています。国の医療計画として、医療機関の機能分化、つまり急性期は在院期間を短縮して亜急性期、慢性期につなぎ、さらに次の施設や在宅へつなげることや、各施設が特徴ある医療を提供することが求められています。

その中で大切なのは、他の医療機関と私たちが情報を共有し、地域内で連携してサービスを行うことです。手稲溪仁会病院では地域連携福祉センターを設立し、193の提携病院がそれぞれの得意分野を生かしながら、私たちと連携して患者さまの治療・ケアに当たる体制をつくりました。具体的には地域連携クリニカルパス(詳しくは28ページ)を作り、各病院が何をどこまで担当するかという診療計画の流れを患者さまと医療機関が共有しています。患者さまにとっても、効率的で的確なケアにつながります。

地域連携では、IT、いわゆるネットワークシステムを使った医療連携システムの必要性も増しています。今は手稲溪仁会病院を中心に、いくつかの提携病院との間で、双方向で画像診断を検討する連携システムがあります。さらに、総務省が主管するユビキタス事業として、後志地区のITによる医療ネットワーク事業が認められました。この事業においても手

稲溪仁会病院が中心的な役割を担うこととなりますので、後志地区の医療機関の皆さまとの連携がさらに深まっていくことになります。連携体制の確立は、全体的な地域医療のコミュニケーションを促進しますので、私たちが中心的な役割を担うことは社会的責任であると思っています。

## 日本一のグループになるために

溪仁会グループが発展を続けるためには、乗り越えるべき課題がいくつかあります。まず、組織と個人のめざすものを一致させることです。医療人は職務的な使命感や誇りが強く、一生懸命な方ばかりですが、そこから組織に対するロイヤリティ(賛同)が生まれると組織が大きく飛躍します。それが経営の力であり、これをいかに高めるかが大きな課題です。

また、私たちの医療・保健・福祉の事業体は、理念は共有していてもそれぞれの病院・施設は自主自立しています。その一つ一つが力をつけると同時に、全体が連携の輪をつくることで、札幌全体を巻き込んだ地域づくりに貢献したいと考えます。

もう一つ、日本の医療は土日と祝日に休みますが、患者さまの病気に休日はありません。将来の夢として、患者さまのためというならば、私たちは365日医療をするべきです。今年も手稲溪仁会病院は、連休に当たる土曜日は平日と同じ勤務としました。もちろん、ワークシェアリングをして、労働過剰になるのは防ぎます。病気は時を選びませんから、それに応えるのが私たちの仕事です。

溪仁会グループは日本を代表する医療・保健・福祉の総合事業体をめざしたいと思います。日本一とは、数ではなく質のいいものを提供することで、私たちがモデルになる、先陣を切る仕事をしていきたいと思います。そのためには総合力を持った専門家の集団を作らなければいけません。将来は、溪仁会グループの新しい病院や施設を支える“多数精鋭”を、私たち自身が大学やメディカルスクールを作ることで育成する必要があると考えます。それができてこそ、日本をリードするグループになれると思っています。

今後とも、溪仁会グループの活動に一層のご理解を賜りますようお願い申し上げます。

## 第三者意見



東京交通短期大学 学長

**田中 宏司** (たなか ひろじ) 様

東京交通短期大学学長・教授  
経営倫理実践研究センター理事・首席研究員、  
日本経営倫理学会副会長、経済産業省・日  
本規格協会「ISO/SR国内委員会」委員等を  
務める。著書に『コンプライアンス経営【新版】』  
(生産性出版、2005年)、『CSRの基礎知識』  
(日本規格協会、2005年)、『実践!コンプライ  
アンス』(PHP出版、2009年)、『CSRハンド  
ブック』(監修、PHP出版、2009年)など。

『溪仁会グループCSRレポート2009』は、2006年以来第4回目の発行となる。前年度は、4つの事業理念を中核にしてCSR活動をまとめていた。今回のレポートは、溪仁会グループの創立30周年にあたることから、原点にある志、理念を改めて見直し、さらなる未来への持続的な発展を目指して、「社会的責任30年の歩み」を特別企画として巻頭に掲げている。

当グループの30年の歩みを見みると、草創(1979～1984年)、改組(1985～1989年)、拡大(1990～1999年)、挑戦(2000～2003年)、変革(2004～2005年)、宣言(2006～future)と6区分して特徴を整理している。このような原点を見直す姿勢は、現在のグループで働く一人ひとりのCSR活動の基盤となると確信する。

また本レポートは、グループの重要なテーマについて、活動の担い手として“職員がどのような思いや姿勢で取り組んでいるか”について、“現場の声”をドキュメンタリータッチで紹介している。現場における医師や介護福祉士、フライトナースなどの働く姿は、充実して美しい。さらに、当グループの先輩からのメッセージやステークホルダーミーティングを通じて、内外の関係者との意見交換を行い、“ステークホルダーの尊重”に格別の配慮をしている。一方、社会への重要な情報開示として、病院・施設ごとの概要・活動の説明、職員紹介なども行っている。

理事長秋野豊明氏のトップメッセージ「溪仁会グループの明日へ向けて」は、本報告のまとめとして、挿尾を飾っている。本レポートは、地域医療の中核として保健・医療・福祉の分野で活動する機関としての特色を、見事に浮き彫りにしており極めて優れていると高く評価する。

今後、当グループがさらに未来に向けて持続的に発展するために、留意すべき点を挙げると次の通りである。

第1は、2010年9月に発行予定の国際的な社会的責任規格ISO26000への対応である。

この規格は、あらゆる国、地域における企業のほか病院、大学、地方自治体、NGO/NPOなどあらゆる組織を対象としている。ガイダンス規格であり、第三者認証を目的としないが、当グループとしても、規格に盛り込まれている組織が取り組むべき7つの中核主題(組織統治、人権、労働慣行、環境、公正な事業慣行、消費者課題、コミュニティ参画及び開発)について、改めて実態を見直し本業に根ざした自主的取組を期待したい。

第2は、当グループとして年度の重点目標・計画については、“実践実績、自己評価、次年度への課題”の視点からの総括があると、社会からの信頼が一段と高まると考えられる。

溪仁会グループのCSR活動は、着実に成果を上げている。今後とも一人ひとりがグループの事業理念、ミッション、サービス憲章と行動基準などにに基づき、地域から信頼され、保健・医療・福祉の分野で重要なテーマに誠実に取り組まれることを期待する。

1979年に西円山の地に老人専門病院を開設して30年、激動の時代を乗り越え2009年、溪仁会グループは30周年を迎えることができました。

第4号となるCSRレポート2009は、「社会的責任30年の歩み」をテーマに私たちの30年の歩みに焦点をあてて構成しました。現在、30年前には生まれてもいなかった職員も多く働いています。温故知新、この機会に私たちが「親切 丁寧 敬愛」（札幌西円山病院院訓・1979年制定）の灯を高く掲げて歩みだした社会的責任のミッションを振り返ることは、グループの明日への更なる飛躍に結びつくに違いありません。

そのように歩んできた私たちの拠って立つところはプロフェッショナルマインドです。特集「この道をひらく」では、医療・福祉の現場で活躍している職員にフォーカスをあて、その実践を紹介しました。職員の活動を身近に感じることができれば嬉しいかぎりです。

ステークホルダーの皆さまの座談会では、情報発信とコミュニケーションのあり方についてご指摘いただきました。コミュニケーションはCSR活動の土台ですので、より皆さまから共感をいただけるような取り組みを整えていきます。

第三者意見として田中宏司先生からは、ISO26000への自主的な取り組みと、年度目標・計画についての実践実績・自己評価・次年度への課題などの視点からの総括が必要とご指摘いただきました。重要なアドバイスと受け止め、これからのCSR活動に活かしたいと思えます。

今後ともステークホルダーの皆さまと溪仁会グループを繋ぐ絆として、CSRレポートに報告すべき内容の充実を図っていきたくと考えております。

最後に、編集・発行にあたりご協力いただいたステークホルダーの皆さま、多くの職員に心より感謝申し上げます。

医療法人溪仁会 法人本部  
CSR推進室 室長  
奥田 龍人

各病院、施設、事業の実績データを収載した「溪仁会グループ年次報告書」は、  
溪仁会グループホームページをご覧ください。

溪仁会グループ年次報告書

検索

●編集事務局／

医療法人溪仁会 法人本部 CSR推進室

●発行年月／2009年12月

●次回発行予定／2010年10月を予定しております。

●発行責任部署および連絡先

医療法人溪仁会 法人本部

〒064-0823 札幌市中央区北3条西28丁目2番1号サンビル6F

TEL 011-641-9970 (代) FAX 011-641-9951

E-mail : editor0110@kejinkai.or.jp

# ずっと。



私たち溪仁会グループの仕事は、  
あなたの病気を治すことだけでなく、  
年齢に応じた健康維持のアドバイスをしたり、  
介護を含めた老後の安心のお手伝いをするでもあります。  
心身ともに輝いて生きるために。  
生涯にわたって溪仁会グループは、ずっとあなたのそばに。

## 溪仁会グループ

〒064-0823 札幌市中央区北3条西28丁目2番1号 サンビル6F  
TEL 011-641-9970 (代) FAX 011-641-9951

[溪仁会グループホームページ](#)

溪仁会グループ

検索

<http://www.keijinkai.com>